

陳舜臣さんを語る会通信

NO.15 Aug. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年8月15日

『残糸の曲』と『桃花流水』は一對 まず、『残糸の曲』を取り上げます

『残糸の曲』と『桃花流水』は一對のもの、連続するものですが、陳舜臣さんは、集英社『陳舜臣中国ライブラリー 7』「自作の周辺（対談）」で、「ただ、『残糸の曲』は週刊誌ですから、アミューズメントの要素が多くなっているんです。『桃花流水』は新聞ですから、書くにあたってちょっと心構えが違った」とおっしゃっています。

『残糸の曲』は、『週刊朝日』に1970年1月2日～12月25日まで連載された後、1971年4月に朝日新聞社から『残糸の曲（上）（下）』として刊行されました。陳舜臣さんの小説は、読むのに根気の要る作品も多いですが、『残糸の曲』は、引き込まれ、一気に読み終えました。右の画像は朝日文芸文庫版の表紙です。

本「通信」第15号で『残糸の曲』を、第16号で『桃花流水』を取り上げます。



《 1. 時代背景及び執筆意図 》

以下は、集英社『Who is 陳舜臣』「自作の周辺『桃花流水』」からの抜粋引用です。これは、集英社『陳舜臣中国ライブラリー 7』「自作の周辺（対談）」を再構成したもので、全文、陳舜臣さんの言葉のように読みとれるのですが、もとは、大半、対談相手、稲畑耕一郎氏の言葉です。

下線は編集委員の加筆。

これは、元号が大正から昭和へと変わる一九二六年の早春から、満州事変（一九三一年）や二・二六事件（一九三六年）を経て、盧溝橋事件の翌日までを描いています。つまり、昭和の初めから日中戦争にいたる時代の風を、『残糸の曲』では書いたんです。その主人公も、自分のアイデンティティーを求めるというテーマです。自分がはたして日本人なのか、中国人なのか…。中国人なのか日本人なのか、どちらともいえる立場の主人公がその時代を見つめているわけです。それは、私の目でもあったんです。作家というのは、自分の生きた時代というのをどう物語っていくかが大事ではないか。司馬遼太郎、いちばん書きたかったのは、自分の生きた武帝の時代だったと思うんですよ。

この二作品に扱われている時代は、私の幼年期から少年期に相当するわけです。

生まれた環境ですね。それがスタートです。台湾人でありながら日本に生まれて、日本人として育ったということです。

上の引用は、『桃花流水』について語る中で、『残糸の曲』に言及している箇所なので、両書に、ともに当てはまる記述になっています。

《 2. 主な登場人物 》

かんしゅうへい 関修平	名張の、母方の叔父夫婦のもと、水野家で育てられる。尋常小学校卒業とともに神戸の父・関啓成のもとに引きとられ、中国人となり、跡取りとして大人になる
水野健一	水野家の長男。関修平のいとこ
服部功介	水野家の隣家、服部家の長男。硬質なさわやかさが魅力的で、修平が憧れている
服部歌子	功介の妹。修平の幼馴染み。深く関わってくる
関啓成	修平の父。神戸の海岸通りで貿易会社新福隆公司をいとなむ華僑。自宅は山手の北野町で、三人の娘がいる。中国籍
関素琴、玉琴、秀琴	関家の三姉妹。修平の姉たち
関啓雲	啓成の兄。妾の子。弟が経営する新福隆公司に住み、働いている。日本国籍
関路琴	啓雲の娘。修平のいとこ。深く関わってくる
関昌平	啓雲の息子。京都の三高の学生
鄭開南	新福隆公司の若い店員。修平に協力
李岳源	順建公司の長男。素琴の夫となる
広瀬宗吉	新福隆公司と関係の深い得意先である広瀬商店の店主
仙吉	広瀬商店の若い店員。親友。修平に協力
蘇紹瓊	そしょうけい。蘇家の娘。秀琴の友人
蘇子穀	蘇紹瓊の叔父。法号・蘇曼殊。バイロンやユーゴの訳詩で若者に親しまれた
呉隆天	ベトナム人。香港で修平が北京語と英語を学んだ立誠書院での友人
呉愛和	呉隆天の妹。兄妹とも深く関わってくる
馬仲英	匪賊の頭目の息子だが、蒋介石に見出され軍官学校に入り、甘肅省西部を支配下におく将軍に。大回教帝国建設の夢をもつ戦争マニア
マクドナルド	イギリス人。武器も扱う商人。深く関わってくる
ジョル	カザフ族集落の長老の第三夫人。修平と共に部落を脱出。のちに上海で「西北実業公司」を経営

『残糸の曲』 あらすじ

《1. 名張から神戸へ》

主人公関修平は4歳のときから、名張の、母方の叔父夫婦のもとで育ちます。1926年、12歳、尋常小学校卒業とともに神戸の父・関啓成に引きとられますが、なぜか、父の会社、新福隆会社の社屋の3階に住む伯父の家族と一緒に生活することになります。

ところで、新福隆会社の場所、間取りなどは、陳舜臣さんの家業、泰安公司(下図①)がモデルになっています。市電通、内海岸、その他もそのまま描かれています。下図①②③は編集委員加筆。

修平はこのあいだから、栄町の市電通の山側を、ぶらぶらと歩くことをおぼえた。五丁目の東角が毎日新聞神戸支局(下図③)で、表にその日の新聞を貼りつけている。修平はそれを丹念に読む。(中略)そこがすむと、もうすこし西へ行く。五丁目山側の中ほどに、朝日新聞神戸支局(下図②)があり…。

修平は学校には行かず、南京町の薬局の主人に福建語、その息子に中国語・北京語を習い、近くの広瀬商店の主人の弟には数学と英語を教わります。

また、義母と姉たちの冷たい目を意識しながらも、伯父の家族からは分け隔てを感じず、少年店員鄭海南や、広瀬商店の店員・仙吉ら親しい友人もでき、商売についての知識も増え、一年が過ぎます。

新しい年、1927年は鈴木商店が破綻するなど激動の年となります。

《2. 蘇曼殊のこと》

この時期、修平は、姉・秀琴の友人、蘇紹瓊^{そしょうけい}と知り合います。紹瓊は蘇曼殊^{そまんじゅ}の姪で、ともに実在の人物です。

蘇曼殊は、中国人を父、日本人を母として横浜に生まれ、清末の革命運動に参加、のち僧籍に入ります。バイロンやユーゴの訳詩でもしられ、中国の若者に大きな影響を与えた人物です。

紹瓊は深く叔父・蘇曼殊に傾倒し、「蘇曼殊のなかに、彼女はもぐりこみ、その魂と合一することで、安心立命の地を得ている」ように見え、修平は、そんな紹瓊をうらやましいと思う一方、「飄零^{ひょうれい}」を感じていました。紹瓊の訃報に接したのはまもなくのことでした。■1996 朝日文芸文庫版では「紹瓊」、1987 講談社『陳舜臣全集第十六巻』では「紹琮」。「琮」は「瓊」の異体字。

《3. 大陸の政局》

神戸で生活する修平の身のまわりにも、大陸の政局が影を落とし始めます。

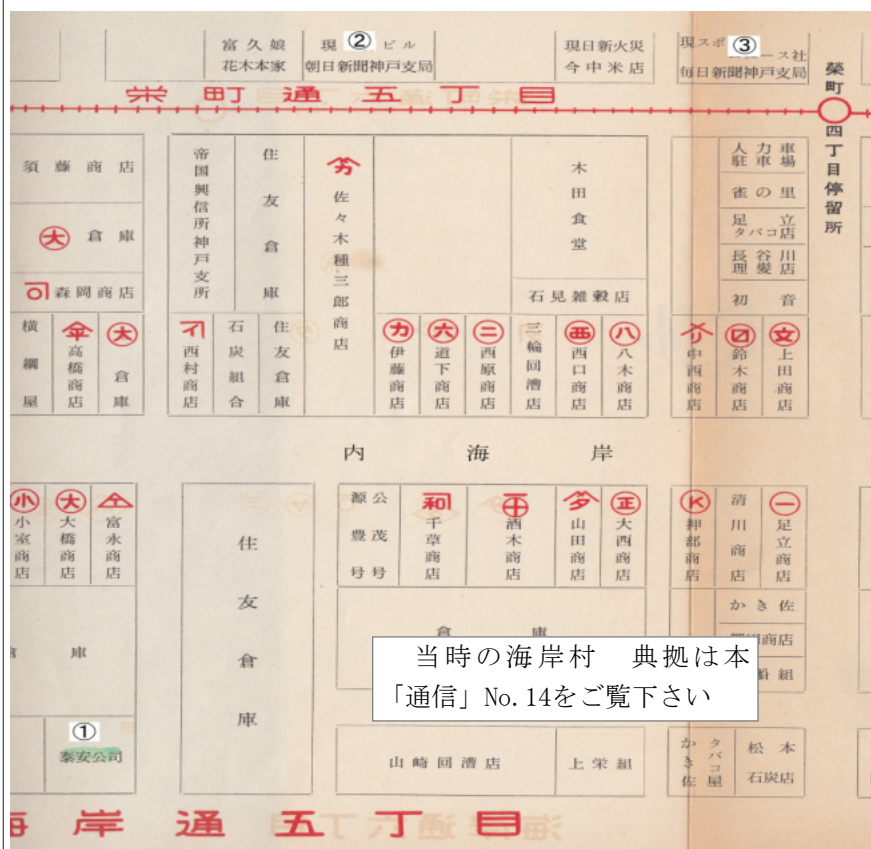
ある日、修平は伯父に呼ばれます。修平が中国語を習っていた、南京町の薬局の郭明志さんが、中国へ帰り、どうしたわけか逮捕され、いま南京の監獄にいるから、釈放の嘆願書を書けと言います。

伯父は修平にわかりやすいように、大陸の情勢を

かいつまんで説明した。 — 北伐軍は北方軍閥打倒のため、国民党と共産党が合作したのだが、最近両党の協力関係にヒビががはいり、各地で共産党とその同調者にたいする弾圧がおこなわれている。そのどさくさに、郭明志はつかまったのだらうという。

北野町の父の家に居候している学生、陳牧憲が突然姿をくらまします。3姉妹の次女玉琴は牧憲と親密らしく、「国に帰ったわ。上海か南京でしょ」と冷静。どうも、牧憲が帰国し、新しい国づくりの運動に参加するらしいことを知っている様子。ここでも、中国の政局が記述されています。

大陸の政局は流動し、武漢と南京に分裂していた国民政府はやっと合流し、国共合作は解消された。毛沢東に率いられた共産党の一派が、井岡山に拠点をつくったのはその前年だった。



『残糸の曲』 あらすじ (続)

主人公、自分さがしの旅

《4. 大陸遊学》

修平に中国遊学の話が出て、しばらくして、
「やっと香港にきまった」

伯父が修平にそうしめたのは、二月になってからである。「香港は」と、伯父は言った。—「広東語の天下だ。しかし、北京語で教える私塾もある。学校は九月が新学期だが、そんな堅苦しいところではなく、こちらの自由を縛られないように、個人教師が私塾で勉強し、そこを根城にして、ほうぼうに旅行することだな。ひろく世の中を見る。それが、何よりの勉強だ」

修平は、このように香港遊学が決まり、2年を過ごした神戸を去り、大陸へ渡ります。中国で、何年過ごすのかわからない。途中、神戸へ帰ることがあるのかないのかもわからない。とにかく、修平の大陸暮らしが始まります。

香港滞在二年で、立誠書院中級の課程をすませた修平は次の学問ステップまでの余裕に、1930年6月、上海旅行にでかけ、事件に出くわします。

修平は、「打倒日本帝国主義！」を掲げるデモ隊にいとこ・瑤琴の姿を見つけ、彼女に迫る巡警に体当たりして彼女を逃がします。逆に彼が捕まりますが、「三重県の服部功介」と名乗り釈放されます。

《5. 修平、自分探しの旅 — ^{そまんじゆ}蘇曼殊の墓前で —

デモから数日たって、修平は、西湖のほとりに蘇曼殊の墓を訪ねます。下線は編集委員の加筆です。

曼殊大師には、熱狂的な祖国愛を謳った文章が多い。たとえば、『嗚呼広東人』と題する一文などは、愛国者の悲憤慷慨であった。また改良主義の保皇党（清朝皇帝の下で立憲政治をおこなおうと主張したグループ）の巨魁康有為を、ピストルで暗殺しようとして、陳少白にとめられたこともあった。

そんな過激な民族主義的思想は、どこからきたのであろうか？自分の血の不確かなことに、彼は哭いたのではないか。そして、確かなもの、自分の魂を揺るぎなく支えるものを、狂おしくもとめたのではあるまいか？

（日本人と名のれば、すぐに釈放される）

修平は自分の体験したその事実、憤慨しようとした。— 中国人なら、容赦なくしょっ引かれて行くのに、日本人はなぜすぐに許されるのか？

血のたぎるのを彼はかんじた。というより、彼が灼熱する血の奔流を望んだのである。日本人から中国人になった特異な経歴は、彼に不拔の位置へのあこがれを持たせた。そこから、なんの疑念もなく、

ひたすら燃えさかることのできる場所を。—

あのとき、日本人と言うべきではなかったのだ。面倒なことになっても、中国人で通すのが正しかったであろう。

曼殊の墓前で、修平は自分を責めます。

修平の「わが根をもちたい」との願望、「自分さがし」の思いはますます強まります。



杭州 蘇曼殊墓 騰訊網より

蘇曼殊は、陳舜臣さん思い入れの一人です。そのことは、陳さんの作品に蘇曼殊を描いた、『桃源遙かなり』所収「燕の影」という短編があることでもわかります。こちらもあわせてお読みください。

《6. 自分さがしの旅は続く 中国大陸西北地方へ》

修平は、大陸暮らしが5年目に入った1932年秋、長距離自動車道の道路整備を請け負ったアメリカ人技師の通訳に採用され、中国大陸西北地方へと向かいます。

陳さんは、どうして修平をこのような辺境へ向かわせたのでしょうか。それは、「揺るぎのない場所へのあこがれ」、「自分さがしの旅」、と表現しています。そして、陝西省の風物に出会った修平に、
「祖国の山河。 — なぜかそれを強く感じる。心のなかに、ふしぎな力を打ちこまれるのを感じる」と言わせます。修平をこんな土地に向かわせる理由付けに、四代前のご先祖の「新疆への自己流罪」という筋まで織り込みますが、必然性に欠けます。

陳さんは、甘肅省、新疆省の政情について、楊增新、馬仲英といった実在の人物もまじえ、かなり詳しい説明を加えます。

数日の余裕ができ、修平は一行から離れ、駱駝の隊商に加わり敦煌見物に出かけます。途中、カザフ族匪賊に襲われ、駱駝から落ち、足を骨折します。カザフ族に捕らわれますが手当を受け、匪賊と生活を共にすることになります。隙を見て修平は、匪賊の首領夫人ジョルと共に上海へ逃げ戻ります。

あらすじ（続々） 神戸へ戻り「新福隆」再建、再び上海へ

《7. 追谷墓地に父の墓地を求める》

修平が父の訃報に接し神戸に戻ったのは1934年早春で、中国大陆で6年を過ごしたことになります。神戸に戻って最初の用事は父の墓地さがしでした。■追谷墓地は六甲山系の一つの谷にあるひな壇状の墓地です。JR元町駅を東へ出て鯉川筋をまっすぐ20分強北上した突き当たりが「海外移住と文化の交流センター」で、この西側の急な坂道を登ったところ
です。以下、引用します。下線は編集委員の加筆。

在留中国人のために、神戸には『中華義荘』という専用の墓地がある。（中略）修平の父も、とうぜんその中国人墓地に葬られるはずなのだ。

ところが、義母が猛烈に反対した。（中略）

彼女によれば、仇敵の家庭の墓のそば近くに埋葬されると、夫は死んだあとも争わねばならず、その魂がやすまらないという。（中略）

では、ふつうの日本の墓地にしようということになり、義母は石碑店に紹介された追谷墓地に墓を建てるつもりだった。北野町の家から車で行けば、五分もかからないのも魅力であったらしい。

修平はいま秀琴の案内で、そこを見に行こうとしているのだった。追谷墓地には、ごくすくないが、中国人の墓もあった。有名な亡命画家胡鉄梅の墓もそこにある。（中略）

追谷は六甲山系のうちの一つの谷で、（中略）正面は左右から山塊がまじわって、そのすきまに、神戸の街の一部が、早春の陽光をうけて、松の枝のあいだにうかんでいるように見えた。



追谷墓地十六区にある
胡鉄梅の墓
白い矢印

《8. 新福隆会社の再建》

修平の父の会社・新福隆会社の商売は数年、赤字が累積していました。そこへ、三姉妹の長女・素琴の夫の会社・順建会社が倒産し、それが決定的打撃となります。父は、最悪の事態を避けようと、金策に奔走し、過労がもとで、倒れたのです。

伯父関啓雲夫婦は台湾に帰り、番頭は辞め、20人もいた店員は3人になっていました。そんななかで、20歳の修平は、わずか残った店員と再建に力を尽く

すこと3年、1936年12月12日、債務完済記念の祝賀会を開くまでになります。

《9. 西安事件》

上述祝賀会が開かれた1936年12月12日は、西安事件の起こった日です。これはもちろん、陳舜臣さんがそう合わせたのです。引用します。



驪山（りざん）のふもとにある
「西安事変旧址」の石碑

九・一八事変（満州事変）で東北を追われた青年元帥張学良の東北軍は、軍事委員長蔣介石の命令で、西安に移駐していた。西安はいにしえの長安の都である。その西安からあまり遠くない延安には、瑞金を放棄して大長征をした中国共産党が、根拠地をつくっていた。張学良麾下の東北軍は、その共産軍の討伐を命じられていたのである。

だが、東北軍は共産軍ではなく、日本軍と戦っていた。彼らは満州で日本軍と戦い、そして敗れたのである。抗日意識は火と燃えて、雪辱を期していた。そんな彼らに、

— 延安の紅軍を撃て。

という任務が与えられたのだ。（中略）

— 紅軍も中国人ではないか。

逡巡する張学良督戦のため、南京から西安に乗り込んできた蔣介石を、張学良が監禁し国共内戦の停止と挙国一致による抗日を迫ったのが西安事件です。

《10. 進む道 定まる》

修平は1937年春、社用で上海へやって来ます。3年ぶりの上海です。その上海で、自分の進む道を決めざるを得ない出来事が待っていました。

今まで、反日・反帝国主義の運動、凍結派（中国を日本に売り渡そうとする組織）の活動など、修平を巻き込み、いろんな出来事がおこりました。ところが、今度は、自らがその一つの組織に主体的にかかわることになります。

「瓦礫を片づけて、金字塔を建てたい」

「爆裂の焰があがるところにしか、行く道がない」

いよいよ大詰めです。

筋をたどるのはここまでとしておきましょう。

このページの画像はどちらも編集委員の撮影です。